

【新版】はしがき

本書は、日本法史を学ぶ意義と愉しさを、法学部生の皆さんに知ってもらうために企画された日本法史入門書である。初版が刊行されたのは、平成二二（二〇〇九）年十月であったが、従来の概説書のような時代ごとの体系的な叙述スタイルをとらず、現代の法制度からみて異質で興味深いと思われる一九のテーマを選び、史料を読み解きながら解説を加えるという、類書にはない新しい手法を用いたためであろうか、幸いにして好意的に迎えられ、版を重ねることができた。重版の度に、必要最低限の加筆補訂を行ってきたが、取り扱う対象項目を増やしてはどうか、古代および近代部分を補足してほしい、あるいは、外国法史からみた日本法史の特質についてのコメント欄を充実すべきだなど、多くの貴重なご意見を頂戴した。

そこで、初版刊行五年を機会に、旧稿に全面的な改訂を施して新版を編む方向で検討に入った。その結果、記述の重複や読者にとって理解しづらいと思われる部分を削除するなどして旧稿を整理しつつ、取り扱う対象項目を二六に増やすとともに、執筆者として新たに北康宏氏に加わってもらうことで古代部分の充実を図り、さらにいくつかの項目で近代への接続・展望を補足することにした。ただし、外国法史からのコメントについては、旧版に収録したドイツのほか、イギリス・フランス、さらに中国法史からのコメント欄を設けるべく検討を重ねたが、頁数などの制約もあって、結局は断念せざるを得なかった。

旧版の「はしがき」でも述べたように、本書で取り上げるテーマは、日本法史における重要問題のうちの、ほんの一部分にすぎず、しかも、どのテーマについても、先学による豊富な研究の蓄積がある。新版においても、各講では、できるだけ慣れ親しまれている標準的な史料を用い、適宜ルビや傍線を付すなどして、わかりやすく叙述するよう心掛けたが、他方では、最新の研究成果を盛り込むよう努め、ときには、通説にこだわらず、多少難解であっても、執筆者の見解を前面に押し出した場合もある。

もともと、限られた紙面では、理解の前提として必要な、各時代の社会・経済的状況や法・裁判制度の全体構造などについて詳しい説明をする余裕はなかつたので、これらに関しては、次に挙げた基本文献を参照してほしい。さらに、巻末に掲げた各講ごとの参考文献や史料出典の一覧表などを手掛かりにして、皆さん自身で、問題点をさらに掘り下げていっていただければと願っている。

この新版の編集作業においても引き続き、編集部の方木和久氏に、ご尽力いただいた。厚くお礼を申し上げます。

二〇一六年三月

執筆者を代表して

村上 一博

●基本文献

- 朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝編『日本の社会史』全八卷（岩波書店、一九八六～八八年）
- 浅古弘・伊藤孝夫・植田信廣・神保文夫編『日本法制史』（青林書院、二〇一〇年）
- 石井良助編『新法律学演習講座 日本法制史』（青林書院、一九五九年）
- 同『日本法制史概説〔改版〕』（創文社、一九六〇年）
- 同『略説日本国家史』（東京大学出版会、一九七二年）
- 同『明治文化史（新装版）第2巻 法制』（原書房、一九八〇年）
- 岩村等『入門日本近代法制史』（ナカニシヤ出版、二〇〇三年）
- 大竹秀男・牧英正編『日本法制史』（青林書院、一九七五年）
- 川口由彦『日本近代法制史〔第二版〕』（新世社、二〇一五年）
- 高柳眞三『日本法制史』（一）（二）（有斐閣全書、一九四九・六五年）
- 日本近代法制史研究会編『日本近代法二二〇講』（法律文化社、一九九二年）
- 福島正夫編『日本近代法体制の形成』（上・下）（日本評論社、一九八一～八二年）
- 藤田正・吉井蒼生夫・小澤隆司・林真貴子編『日本近現代法史〔第二版〕』（信山社、二〇一五年）
- 牧英正・藤原明久編『日本法制史』（青林書院、一九九三年）
- 水林彪・大津透・新田一郎・大藤修編『新体系日本史2 法社会史』（山川出版社、二〇〇一年）
- 宮地正人・佐藤信・五味文彦・高壱利彦編『新体系日本史1 国家史』（山川出版社、二〇〇六年）
- 山中永之佑編『新・日本近代法論』（法律文化社、二〇〇二年）
- 同『日本近代法案内』（法律文化社、二〇〇三年）